



— 5 —

津 守 眞

○アメリカの女性と男性

日本にいる時、アメリカでは女を大事にするから、礼儀を辯まえて気をつけないといけないぞと方々で云はれた。電車の乗り降りには女を先きにして、血洗いは男がして、といろいろ頭の中で考えてきた。

☆ ☆ ☆

私はいつも学校に行くのに、市電にのつて通う。アメリカは自動車が発達しているけれども、私のように自動車を持たない学生ばかりでなく、通学と通勤には、駐車場にも困るし、市電もよく使うことは日本と同じである。電車にのる時、おりる時、男

も女もない。ごたくである。男の人が座つていて、女の人が乗つてきて、腰かける所がなくとも、席をゆずるといふことは先ずない。女の人が乗つてくると、ばね仕掛のように席をゆずるのは、日本人の学生位なものである。但し、女の人が座ろうとして居る所によからずばやく座つてしまふような者もないが、それから市電にのつて居るのは女が絶対的に多い。これは、屋間、男が自動車に乗つて、通勤してしまふということにもよる。

☆ ☆ ☆

家庭で、料理、洗濯、掃除を引き受けるのは、疑もなく女であることは、此のアメ

リカでもかわりないようである。男が料理をしたというと、珍しがられる。食後の皿洗いも、主人は坐つて新聞をよみ奥さんががたごとと後片附をするというのが、ごく当り前のことである。奥さんが、夜になつてアイロンをかけていても、主人は、煙草をふかして雑誌をよんでいるという調子である。勿論、これは家庭にもよるらしい。何人かの人に、男は仍らかないのか、ときいてみた。勿論結婚した時は、男が一緒になつて仍らくけれど、一寸たてばもうこの調子ですよ。といつて苦笑つていた。こういう人情はどここの國もかわりないらしくて頼もしい。

☆ ☆ ☆

二三十年前には、所謂騎士道で、男が女を護衛するという風習が強かつたそうである。今でも上流階級の間では、比較的そういう傾向がある。或るいはかなり強くあるのではないかと思はれる節もあるが、私は余り接する機会かないのでよく分らない。この騎士道的婦人護衛の精神がすたれて来たのは、古い人にきく所によると、婦人が参政権を得た頃からだといふ。女が独

立したら、その代りに男は、さつぱり女のことを構はなくなつた、といつてゐる。

奥さんが御主人に、誰を投票しようか、ときいてゐた頃は、電車の中でも男は女に席をゆずつたのだそうである。それが、女が勝手に新聞をよんで御主人に黙つて投票するようになってから女が乗つて来ても男は知らぬ顔をして新聞をよんでいるようになったそうである。

それでも、アメリカの男性の中には、女を美しくしておくのは男のつとめだ、というふうな気持もかなりある。たしかにアメリカの女性には、七十、八十になるまで美しく保つことをつとめている。服装と化粧と。あるかなりの年配の婦人に、アメリカをどう思うか、と聞かれたことがあつた。私は、皆なかなか、きれいですね、と答へたら、朝起きた時を見てみる、皆同じだ、と云つて笑つてゐた。女のあくどい化粧程みられたものではないが、それなりに女を美しく保つておくのは男のつとめであつたのである。貧乏なら貧乏なりに。

☆ ☆ ☆

道を歩いていて気づくのは先ず女が昂然と胸を張つて闊歩してゐる姿であらう。日本でアメリカ婦人を見る時、そういう印象を受けるのと同じ様に。それを見ると、アメリカの女性は氣位が高くとりつきにくいかと思う。しかし一度家の中に入ると全く日本の女性とかわりない。家庭は勿論。角ばらない会合においては。

☆ ☆ ☆

日本でも行われているが、エンゲージングというのがある。これは先づアメリカでは例外なく習慣になつてゐる。婚約をすると、男が女に、ダイヤの指輪を贈るのである。此の指輪は大がいきやしやで比較的高価なものだから、すぐにみわけがつく。結婚をすると、又宝石のつかない、リングだけを贈る。最近ダブルリングと云つて女から男にも贈ることが多くなつてきた。この指輪によつて男は、女を容易に見分けることが出来る。大学の教室でも、面白いことが起る。氣をつけてみると、指輪をした女のそばには、男の学生は坐らない。

○こども

電車を降りて、並木路を歩いてゐると、あちらから、こちらから子供達が私の名前をよんでかけ出して来る。どこから呼ばれたのかと思つてきよきよしてゐると、遠くの方でブランコの上から手をふつてゐる。子供に名前をよばれるようになるというのはうれしいものである。子供の親しみはどここの国もかわりがない。ミネアポリスは冬から夏が急にやつてくる。雪がとけると、急に木の芽が萌え出し、芝生が青々としてくる。そうするともう子供は自然の中の生物である。冬の間は、雪と寒さにとちこめられて、刺戟の強いテレビジョンにばかりかぢりついていた不自然な子供達も今は、暗くなるまで外をとびまわつてゐる。私のいた家庭に、三人の子供がいた。トミーが小学校五年生の男の子、マギーが二年生の女の子、チャックが幼稚園の男の子である。夕食の時には必ず家族皆食卓をかこむことになつてゐる。トミーとチャックは、真黒になつてかけこんできて、一口か二口食べただけで、又外にとび出してし

まう。八時になると父親が大きな声でどなると、真黒になつて入つてきて、母親が面倒をみてベットに入る。時々父母が留守をする時は、近所の高等学校九年生の女の子のナンシーが一晩一ドルで子供の面倒をみる。その時は大きわぎである。いつもは十分もすれば静かになるのが、チャックはねる前に漫画をみるのだと云つてわめきトミーは足を洗わないといつてけんかになる。マギーが悪口を云つて又ナンシーが一縮にむきになつてけんかをする。

夜九時になると、ミネアポリス市では、サイレンをならす。これは、子供達に、うちに帰れという合図である。十六才以下の子供が町を一人で歩いていると、巡査とめられる。ナンシーには二人弟があつて、帰宅時間になると、父親が笛を吹く。一つ笛は末の子、二つ笛はその次、三つ笛はナンシーである。三つ笛がなるとナンシーは帰る。

### ○教育学者、心理学者の死

最近教週間の中に、有名な教育学者、心理学者がかなり死んだ。デューイー教授の死

は世界中に有名であろう。デューイー教授の教授生活のふり出しはミネソタ大学であり。ここからシカゴ大学に移つた。イタリーのモンテッソリーがやはり、つい教週間の見守りながら此の世を去つたであろうか、

と知りたく思う。ネオ・ピヘイウィアリスムで有名なドクター・ハル(Dr. Hall)が死んだのも、此の教週間のことである。それからウェルマン教授(Dr. Wellman)も此の教週間に死んだ。

